



イミグレーションミュージアム・東京 (IMM) ～アートを使ったコミュニケーションの可能性～

(一財) 自治体国際化協会多文化共生課 林田 牧子

イミグレーションミュージアムとは

移民をルーツに持つ住民が多数を占める国や地域において、文化や生活様式の異なることを理解するため、移住の歴史や目的、方法、処遇をはじめ、移民の現状、生活、文化を紹介する施設です。多文化主義政策をとっている豪州では、このような施設において、視覚資料を中心とした常設展のほか、さまざまな企画展、移民同士の交流イベント、多文化教育やワークショップ、人権セミナーなどを行い、多文化共生を促進する一助となっています。

今回はメルボルンのイミグレーションミュージアムにヒントを得て、東京で「イミグレーションミュージアム・東京」(以下、IMMという)というパイロット事業(今年度主催は、東京都、アーツカウンシル東京、東京藝術大学音楽学部、特定非営利活動法人音まち計画、足立区等予定)を企画・監修されている岩井成昭さん(秋田公立美術大学教授)に、IMMについてお話を伺いました。

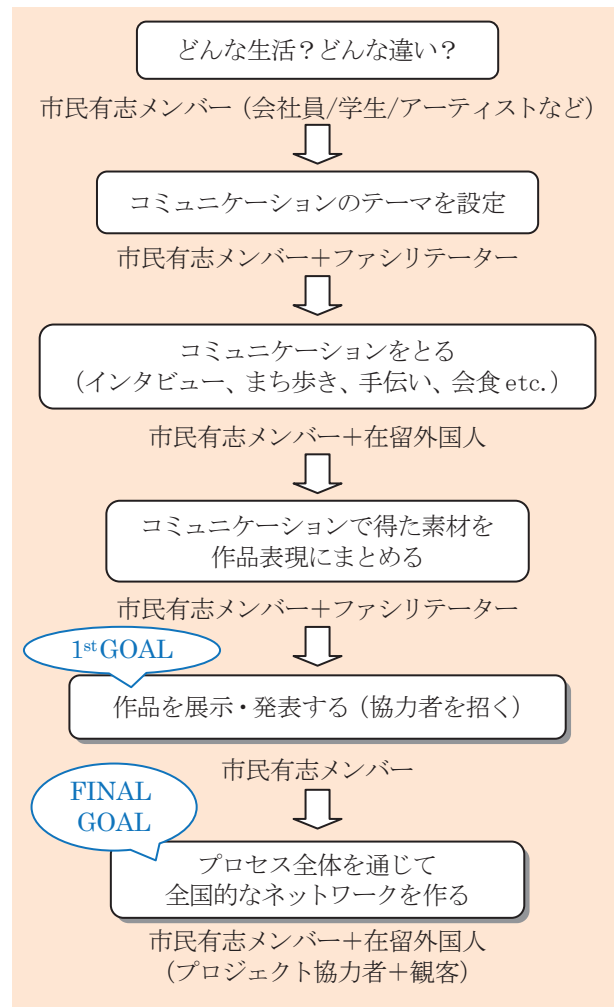
IMM を日本に

岩井さんは1990年代より、欧州・豪州・東南アジアのコミュニティに対する調査をもとに、国内外の多文化化を、映像・音響・テキストなどを複合的に用いて視覚表現をするアーティストです。

日本に「移民」の法的定義はありませんが、在留外国人は増えており、さまざまな在留外国人のコミュニティがあります。この環境にアートを介在させることで、何か学び取れないか、と岩井さんが考えていたとき、移民出身のアーティストが現代美術の手法を取り入れた展示にメルボルンで出会いました。それは移民博物館がもつ堅いイメージとは全く異なり、豪州における多文化の現状を興味深く表現していたといいます。

日本の環境で育った、外国にルーツをもつアーティストは稀なため、メルボルンのシステムをそのまま導入することはできません。そこでIMMは次の方法を採用

しました。



適応・保持・融合

IMMの理念は、**適応**(色々な工夫、意識的な段階)・**保持**(変わらず守り続けるもの)・**融合**(いつの間にか日本の生活に馴染んでいるもの、無意識の段階)という3つのキーワードから、在留外国人の気持ちを整理し学ぶというものです。IMMでは、特に日常生活にフォーカスしています。例えば、インド出身の隣人に「お昼はいつも何を食べますか?」と質問をしたとします。すると相手は「コンビニ弁当」と答えるかもしれません。私



私たちは無意識にステレオタイプの思考に陥って「カレー」という返事を期待しているの、そこで会話が詰まってしまう。しかしIMMでは「どうして?おいしい?」と会話を続けます。すると「プラスチックの葉っぱがいつも入っているけれど、お弁当の中に食べられないものがなぜ入っているの?食べられないものになぜお金を払うの?」という想定外の返答をえることがあります。同じものを見ているけれど、見え方が違う。こういうことを客観的に取り上げることが、多文化共生の大きなヒントになるのではないか、それがIMMの根底にあります。

アートを通じて多文化共生を考える

IMMは2010年にプロジェクトを開始し、初回の展示会は2011年3月、東日本大震災のわずか2週間後に小金井市で行われました。当時について岩井さんは「都民も移民になるかもしれない状況・時期に、帰宅難民の人達に提供されたスペースで展示したことは、IMMにとって象徴的なこと」だと振り返ります。それから3年間は小金井市で開催し、2014年に足立区千住に移ります。その間、多文化共生を考えるうえでよいヒントとなる作品が多々生まれました。その中から3つをご紹介します。

「ミステリー?cooking!」(2011年)では、母国の料理を再現する際、日本ではどうしても手に入らない食材を何で代用し、どのように工夫するのか?について、バングラデシュ出身者にインタビューをします。プティという川魚を使ったカレーが故郷の味だけど、プティは手に入らない。味は鰯が一番近いけれど、小骨がのどに引っかかる感じはどうしても再現できない!この葛藤や工夫は、どの家庭でも起こりえることです。適応・保持・融合がわかりやすく反映された作品です。



(左)「ブルースト現象@東京」(撮影:高島圭史)
(右)「各国・各家・各自の「お手洗い」事情」

そして「各国・各家・各自の「お手洗い」事情」(2013年)。日常的に誰もが使うのに、他人が使用している場は見ない「お手洗い」にまつわる話や全国各地の相違

点をジオラマ化し、ドアスコープから見る作品です。生活に密接しているのに、話しにくいトピックについて、アートという手段が有効だ

ということがわかる作品です。

最後は、においを取り上げた「ブルースト現象@東京」(2016年)という作品。対象物を見ず、においだけを嗅いでもらい、思い浮かべたものを展示にしたものです。今まで嗅いだことのない日本のおい(例:畳・抹茶・味噌など)を嗅いだとき、それを見たことのない人は何を思い浮かべるのか?においを実際に嗅ぐことができる展示にし、正解を示さないことで、来場者も同様の体験ができます。「同じものを見ている、見え方は違う」ことを体験できる作品です。

今後のIMM

岩井さんは最後に、視覚芸術が多文化共生を促進するコミュニケーションツールになる可能性を指摘しました。視覚芸術はデリケートなテーマから多様な解釈を引き出すことができるため、さまざまな地域で多文化共生に係る問題が発生したとき、作品を客観的に見ることを通じて、問題解決のきっかけとすることができるのではないか。そのためにも、今後はウェブサイトやアーカイブを充実させ、活きたツールとして広く提供していきたいと教えてくださいました。

企画によって場所をかえるIMMは、2015年は元飲食店の空き店舗をリノベーションして展示しました。2016年は9月に、足立区千住の空き住居を利用して2つのプロジェクトを展示する予定です。展示詳細などについては、直接IMM事務局にお問い合わせください。

イミグレーションミュージアム・東京 事務局
E-mail : <http://aaa-senju.com/contact>
HP : <http://www.immigration-museum-tokyo.org/>
<http://aaa-senju.com/imi>